

# 大韓民国における宗教文化の観光資源化とその特徴 — テンプルステイ事業の展開を事例に —

川 添 航\*

キーワード：宗教文化, スピリチュアリティ, 観光資源, テンプルステイ, 大韓民国

## I はじめに

近年、日本だけではなく他の東アジア諸国においても、地方経済の活性化や交流人口増加のための方策としてのツーリズム振興が着目されている。ツーリズムの振興においては、主に地域既存の歴史や文化、自然環境を観光資源として活用することができる。そのため、観光資源の開発のために新たに大規模な投資を行う必要などもないとされる。しかしながら、過去には地域の実情と乖離した形で観光資源の乱開発が行われるなど、ローカルなツーリズムの拡大には課題も生じていた。そのため、現在では地域の歴史や文化など、在来の地域資源を活用したツーリズムのあり方が模索されている。

これらの展開の中で、ローカルな宗教文化や宗教施設を観光資源として利用・転用する動きが各地でみられる。これらは宗教の「資源化」や「商品化」として理解することができる（門田 2010）。なかでも、宗教の「商品化」については、宗教団体側から拒否感が示されることもある。一方で、「資源化」や「商品化」を布教や宗教文化の振興のための運動として読み替え、宗教団体側がそれらを推進する、という現状もみられる（卯田 2015, 2021）。宗教という要素が介在したツーリズムを、本稿では「宗教ツーリズム」として捉える。宗教ツーリズムは、物質的消費だけでなく、「充実感」や「自己発見」、「自己実現」といった内的側面を重視する現代の観光者の需要とも適合した形態である（大橋 2020）。

現在の韓国における地方都市でも、ツーリズムは重要な産業として捉えられている。例えば、かつて鉱工業で栄えた都市などでは、産業構造の転換や少子高齢化、大都市圏への若年人口の流出といった課題のなかで、地域独自の観光資源の開発が試みられている。以上のような全国的なツーリズム振興の動きのなかで、2000年代以降、韓国独自の宗教ツーリズムである「テンブルステイ」と呼ばれる取り組みが各地の仏教寺院（以降、単に「寺

院」と称する）で行われている。テンブルステイとは、実際に観光者が寺院に宿泊し、仏教に関する諸活動を経験することを観光商品としてパッケージ化されたものである（写真1）。

テンブルステイに類似した取り組みは、日本国内でもみられる。類似する取り組みに関連する状況を整理しておく。観光庁による令和3年度観光振興事業費補助金では「城泊・寺泊による歴史的資源の活用事業」が設定され<sup>1)</sup>、訪日外国人の増加や観光消費の拡大を目的に、城や寺院、神社を観光資源として活用する取り組みが行われた。このような寺院・神社を「日本ならではの文化や歴史」を体験できるような宿泊施設として活用していく事業方針は、韓国におけるテンブルステイの取り組みとも重複する側面がある。しかしながら、何をもちて寺泊を観光資源とするのか、具体的に寺院が利用者（宿泊者）にどのようなサービスを提供するのか、についての検討はまだまだ発展途上の段階にあるといえる。その際に韓国におけるテンブルステイの展開・現状や事業の成立過程について確認・分析しておくことは重要な作業であるといえる。



写真1 大韓仏教曹溪宗本山  
曹溪寺内のテンブルステイに関する広告  
(2024年2月筆者撮影)

\* 立正大学地球環境科学部

宗教ツーリズムに関する地理学的研究では、これまで下記の3つの視点から分析が行われてきた。まず、世界遺産や地域振興といった世俗的文脈と宗教的文脈との相互関係から、宗教現象がいかんして観光資源化されるのかを考察したもの（松井 2017；深見 2017）、そして、観光化の取り組みのなかで、宗教空間の物理的構成やそれに関連するアクター間のネットワークがどのように変化したのかについて検討したもの（岩鼻 1999；卯田 2020；卯田・松井 2016）、個別の訪問者の宗教意識・スピリチュアリティと観光行動との関連に着目し、その特徴を検討したもの（卯田 2018；川添ほか 2023）である。なかでも、今後の観光需要の多様化という状況下での観光者のパフォーマンスやモビリティを検討する上で、何を求めて宗教ツーリズムや巡礼に参加するのか、といった点の検討が重要となっていくであろう（Scriven 2014）。しかしながら、以上の点について検討する上で、現在、行政や宗教団体（教団）がどのようなコンテンツを観光商品として観光・巡礼者に提供しているのかについて整理することも重要である。その際に、諸所の宗教活動がどのような特徴をもつ観光資源として位置づけられているのかを合わせて検討することも求められる。

本研究の目的は、韓国における宗教文化の観光資源化について、「テンプルステイ」の取り組みを事例に整理し、仏教に関わる諸実践やスピリチュアリティがどのような観光資源として位置づけられ、利用されてきたのかを検討することである。また、合わせて地方の活性化に果たす役割とその課題についても検討する。

本研究では、韓国のテンプルステイに関する既存研究の整理、および、テンプルステイに関する各種施策を取りまとめている「韓国仏教文化事業団（한국불교문화사업단, Cultural Corps of Korean Buddhism: CCKB）」による『テンプルステイ20年史』（한국불교문화사업단 2022）をもとに、その展開について分析していく。本稿の構成は下記のとおりとなる。まず、テンプルステイが開始された背景として、韓国の仏教がどのような歴史を辿ってきたのかについて、主に近代以降を中心に分析する。次に、テンプルステイの開始に至るまでの社会的背景と現在の実施状況について、資料をもとに整理する。そして、宗教文化が観光資源として活用される際の特徴について検討する。

## II 現代韓国社会における宗教

### 1. 韓国の宗教動態

まず、韓国における宗教状況について整理しておく。現代の韓国社会では、キリスト教会の成長が著しい。カトリック教会およびプロテスタント教会は、それぞれ18世紀、19世紀に韓国国内で宣教活動が開始された。特に、現在もソウルとその周辺の京畿道、仁川では、信者数・教会数ともに増加している。韓国のキリスト教会は、カトリック教会とプロテスタント教会ともに教育・医療活動や社会的問題に対する取り組みにも注力している（李 2008）。一方で、韓国における仏教は4世紀に中国から伝来したものが現在まで深く根付いている。現在、韓国の仏教において最大の教団となっているのが曹溪宗（大韓仏教曹溪宗, 대한불교조계종）であり、全国的に多くの寺院が分布している。キリスト教会と同様に、仏教教団も貧困層や高齢者に対する社会福祉活動にも注力している（佐藤 2019）。その他にも、韓国国内ではさまざまな宗教団体（教団）が活動を行っている。

このように、韓国においては、宗教施設は単なる宗教活動が行われるだけではなく、病院や教育の施設運営を通じて教育や社会福祉、文化活動の拠点としても機能している。特に、寺院は文化財としての価値も高く、社会規範や倫理観、先祖観にも影響している。地域社会や世帯の構成を維持していく上で重要な役割を持っているといえる。

世論調査会社である韓国リサーチ（한국리서치）による定期調査（2023年1月から11月まで）の結果をみると、韓国の全人口に占める宗教人口の構成は、プロテスタントが20%、カトリックが11%、そして仏教が17%となっている<sup>2)</sup>。同調査によると、仏教徒の71%は「月に1度も宗教活動に参加していない」と回答している。つまり、カトリックやプロテスタントと並び、仏教もまた韓国における主要宗教となっているにも関わらず、毎日曜日に教会で礼拝を行うキリスト教会と比較して仏教徒が日常的に寺院に訪問する機会は少ない。そのため、寺院が信者の教化や布教の機会も限られている。仏教を信仰する人口の割合を地域別にみると、第二都市・第三都市である釜山・大邱周辺の嶺南地方、江原道で高い。ソウル大都市圏以外の多くの地方都市に寺院が立地していることも特徴的である。

### 2. 韓国仏教をめぐる変化

ここでは、テンプルステイが開始された背景を理解す

るため、朝鮮半島において仏教が拡大してきた経緯や、近現代の動向、仏教教団が抱える課題について整理していく。まず、金（2017）および佐藤（2019）などの文献をもとに、朝鮮半島における仏教の展開について整理する。4世紀後半以降、朝鮮半島へ仏教が伝来し拡大していった。新羅による朝鮮半島統一以降、仏教は国教としての地位を確立している。その後、高麗時代には仏教の教義がより精緻化され、各地に寺院が建立された。李氏朝鮮時代には儒教が国教的な位置づけとなったため、仏教教団に対する弾圧も行われた。しかしながら、民衆による仏教の信仰は引き続き継承され、朝鮮半島において独自の発展を遂げていった。

1910年の「韓国併合ニ関スル条約（韓日併合條約, 한일병합조약）」による韓国併合以降、韓国の仏教教団に対しては、僧侶独身制の一部解消や僧侶の任命・財務に関する権限を植民地政府が直接統制する「寺刹令」が発令されるなどした。これらの施策のなかで、仏教教団も自身の役割や活動内容を再定義する必要に迫られた。太平洋戦争終了後も親日派の僧侶と独立運動に参加した僧侶の間で分断が生じるなど、韓国の仏教は困難な状況に置かれることとなった。李承晩大統領の統治時代（1940年代～1950年代）には、仏教教団における妻帯僧侶の追放（「浄化運動」）が行われるなどしたが、戦後の混乱からの復興に伴い、多くの寺院が再建された（許 2004）。しかしながら、1961年に発生した軍事クーデター（5.16軍事クーデター）により、仏教教団は再び政治的な統制下に置かれることとなった。軍事政権時代には、現在の韓国仏教を特徴づけるさまざまな取り組みが行われた。例えば、歴史・文化遺産として寺院の保存が行われ、また、仏教教団による社会福祉活動、仏教系大学の設立なども行われた。このように、近現代における韓国の仏教は継続して政治権力の影響を受けており、それらに対応し存続を図ってきたといえる。

先述の通り、現在、韓国最大の仏教教団は曹溪宗である。曹溪宗は、教義や実践において特に禅宗の影響を強く受けている。2018年には、近代以前の韓国の精神文化や宗教者の修行、生活を色濃く残した空間として評価され、山岳地域に所在する寺院（山寺, 산사）が世界文化遺産に登録された<sup>3)</sup>。一方で、曹溪宗をはじめ現在の仏教教団は、信者数や参拝者の減少など多くの問題を抱えている。また、少子高齢化を迎える韓国社会において、今後、現代社会の価値観やライフスタイルの変化と対応させ、どのようにして仏教の信仰や教学を継承していくかが課題となっている。

### Ⅲ テンプルステイの取り組みと現状

#### 1. テンプルステイ実施に至る社会的背景

2002年以降の韓国におけるテンプルステイ事業の展開について、『テンプルステイ20年史』（以降、『20年史』と称する）をもとに簡潔に述べることにする。韓国におけるテンプルステイ事業は2002年に開始された。同年は日韓共催でのFIFAワールドカップが実施された年であり、翌年の2003年には、大邱広域市での夏季ユニバーシアードの開催が予定されていた。当時、韓国国内で世界的なメガイベントを行う際に、海外からの観光者（インバウンド観光者）が利用する宿泊施設の不足が課題となっていた。特に、ワールドカップの大会期間中には、宿泊施設において140,000室程度の客室が必要とされた。しかしながら、当時はインバウンド観光者を受け入れることができる観光ホテルは46,000室程度のみであった。その際に、曹溪宗の教団内部で国内の寺院を宿泊施設として開放し、インバウンド観光者を受け入れるテンプルステイ事業が構想されることとなった。

曹溪宗の教団内部では、ワールドカップを契機に韓国に対するグローバルな関心が喚起されるなかで、韓国における仏教の特色を国際的に発信していく方法を模索していた。そのなかで、テンプルステイは方策の一つとして提案されたものであり、メディア等でも宿泊施設不足の解消と韓国文化を発信する取り組みとして着目されるようになった。以上のように、テンプルステイは、当初からインバウンド観光者の増加を見越した取り組みであること、そして、韓国文化の一環として仏教を活用していくことが特徴的であるといえる。

韓国では、高句麗時代から寺院では「修練会」と呼ばれる一般信者を修養者として受け入れる制度が設置されており、1960年代以降は各寺院での修練会は大規模なものとなっていった。しかしながら、伝統的に参拝者を受け入れてきた歴史があった一方で、寺院のなかにはインバウンド観光者受け入れに対する拒否感も存在した。しかしながら、既存の信者を対象とした修練会と、新たな事業として開始するテンプルステイは別の目的を持った活動であり、海外に韓国の仏教文化を伝えていく、というテンプルステイの役割が教団内部でも共有されたことで、そのような問題も解決されていった。事業の構想段階で「修養会は仏教徒をより仏教徒らしくする過程であり、修養会の重要な点は、仏教徒が参加したり、仏教徒になるために参加する仏教徒のためのプログラム」であること、そして、「テンプルステイは、仏教徒でない人



表1 韓国における地域・宗派別のテンプルステイ参加寺院数（2002年）

	曹溪宗	太古宗	天台宗	真覚宗	観音宗	合計
ソウル特別市	2	1	1	1	1	6
京畿道	1					1
仁川広域市	1					1
大田広域市	1					1
忠清南道	2					2
大邱広域市	1					1
慶尚北道	1					1
釜山広域市	2		1			3
慶尚南道	2					2
全羅北道*	3					3
光州広域市	2					2
全羅南道	5					5
江原道**	3					3
済州特別自治道	1	1				2
合計	27	2	2	1	1	33

\*現在の全北特別自治道

\*\*現在の江原特別自治道

（한국불교문화사업단（2022）より作成）

たちが簡単に仏教を体験し、理解できるようにするためのプログラムであり、参加は仏教徒と非仏教徒を区別しない」ことが明確に示されていた。

テンプルステイの開始にあたって、各寺院に対する事業への参加を要請する際に「韓国の歴史と文化、そして仏教文化を世界に知らせる機会であり、伝統的な寺院の参加が不可欠である」という点が強調された。つまり、テンプルステイを実施する寺院は、単に宿泊サービスを提供するだけでなく、並行して韓国の歴史・文化を構成する主要な要素として、仏教に関する宗教文化体験もプログラムのなかで積極的に活用されることが合意された。その後、韓国政府（文化観光部）と曹溪宗が共同でテンプルステイのプログラムを開発した（Wang 2011; Yoon et.al. 2021; Ross et.al. 2021）。最初のテンプルステイは、2002年5月から6月までの42日間、33か所の寺院で実施され、期間中に991人のインバウンド観光者がプログラムに参加した（表1）。

2004年3月には、曹溪宗が主体となりCCKBが設立され、テンプルステイを常設事業として運営することとなった（写真2）。CCKBのテンプルステイ事業では、僧侶だけでなく観光やマーケティングの専門家も関与しており、他の文化事業と並んでテンプルステイを魅力ある観光資源として活用していく指針が定められた。曹溪宗は、テンプルステイを「韓国の伝統文化と仏教の宗教活動を体験できる独自の文化プログラム」として定義し、仏教文化の普及活動の一環として位置づけた（Wang 2011; Moon and Somers 2023）。



写真2 ソウル特別市鐘路区に所在するテンプルステイ統合情報センター（2024年2月筆者撮影）

当初、テンプルステイを構成する様々な体験プログラムは、韓国文化の一環として仏教の修行を体験するものとして位置づけられてきた。しかしながら、日常生活における心身の充実や幸福、豊かさといった「ウェルビーイング（Well-being）」が重視されるようになると、これまで仏教文化の体験として実施されていた参禅（참선）や瞑想といったプログラムは、2010年代以降、ウェルビーイングを求める生活様式と合流し新たな意味を有していくこととなる。例えば、2014年にはCCKBにより新たなプログラムマニュアルが開発され、心身の休養や休息、癒しを求める参加者向けに、企業研修用のプログラムなども開発が進んだ。具体的には、職場や日常生

活で受けるストレスやさまざまな精神的な問題を解決し、コミュニケーションや日常生活における満足度の向上のために設計された。現在では、家庭裁判所と連携した青少年の更生プログラムにも関与している。

『20年史』によると、テンプルステイには「忙しい日常生活に疲れた参加者」の身体的・精神的安定と満足感を提供する「新しい文化観光商品」としての位置づけが加えられていった。2013年から2016年までCCKB代表を務めた曹溪宗のジンファ和尚は、テンプルステイの目的意識を次のように説明している（『20年史』内、165ページ）。「参加者がテンプルステイを通じて得ようとする究極の目的は、宗教的な傾向ではありません。むしろ、心身を癒し、修養することを期待し寺院に来ています。テンプルステイは宗教的な事業ではありません。（中略）今後、テンプルステイは本来の趣旨にふさわしく、公益的な役割を拡大し、現代人の心の癒しなど、社会的役割をさらに強化していかなければなりません」（筆者訳）。つまり、観光資源としてのテンプルステイが果たす役割として、インバウンド観光者を対象とした宿泊施設の確保、そして韓国の歴史や文化の発信という要素に加え、新たに「心身の安らぎ・癒し」や「日常生活からの逃避」という要素が生じており、その公共性がCCKB内部においても重視されるようになった。

## 2. テンプルステイの実施状況

テンプルステイでは、参禅や茶道、料理などさまざまなプログラムが提供されている。テンプルステイに参加する際は、インターネットで希望する寺院、プログラム、日程を選択して料金を支払う。一般的な1泊2日のテン

プルステイのスケジュールは下記の通りとなる（한국불교문화사업단 2018）。まず、参加者は15:00頃に寺院に到着してチェックインを行い、16:00頃にテンプルツアー（利用施設の案内）を受ける。その後、17:00に夕食を摂り、18:00から夕方の儀式に参加する。19:00頃以降も体験プログラムに参加し、21:00に就寝する。2日目は3:00頃に起床し、早朝の儀式を行う。その後、5:00頃に瞑想を行い、6:00に朝食を摂る。7:00に座談会（Communal work）に参加し、8:30に寺院内の散策や瞑想を行う。その後、10:00以降も僧侶との対話などの体験プログラムに参加し、11:00に昼食を摂る。12:00に利用施設の清掃を行い、チェックアウトとなる。

テンプルステイ事業が現在まで拡大してきた背景には、CCKBおよび曹溪宗が主体となった体験プログラムの改善・向上や、資金援助等の韓国政府による積極的なサポートがある（Kaplan 2010）。事業の拡大のなかで、韓国政府も観光産業の育成のためにテンプルステイに積極的に関与することとなった。まず、観光振興開発基金法における観光振興基本計画に基づき、2009年から2013年までの5年間、政府が補助金を通じた支援を実施した。2022年時点で、外交部と韓国観光公社などをはじめ50団体以上と業務協約を締結している。

以上のような取り組みによって、テンプルステイは韓国を代表する観光商品として国内外で認知されるようになり、設備や人材育成、国内外への広報に一層の資金が投入されていった（図1、図2）。2010年代以降は食生活や健康に対する関心の高まりと並行して、寺院で提供される伝統食が着目され、食事に関わる体験活動（寺刹食）がテンプルステイを構成する重要な要素となっ

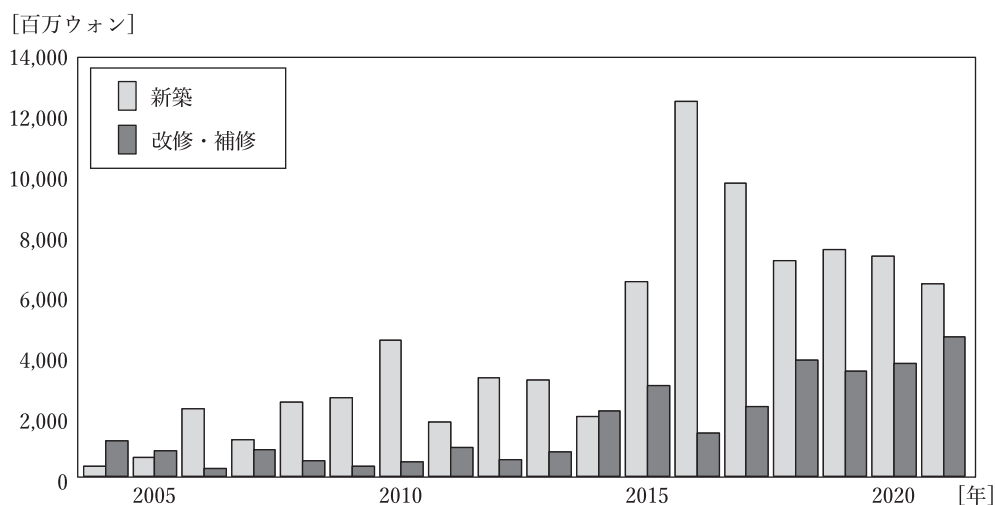


図1 韓国のテンプルステイに関する年度別施設費予算の推移（2004年～2021年）

（한국불교문화사업단（2022）より作成）

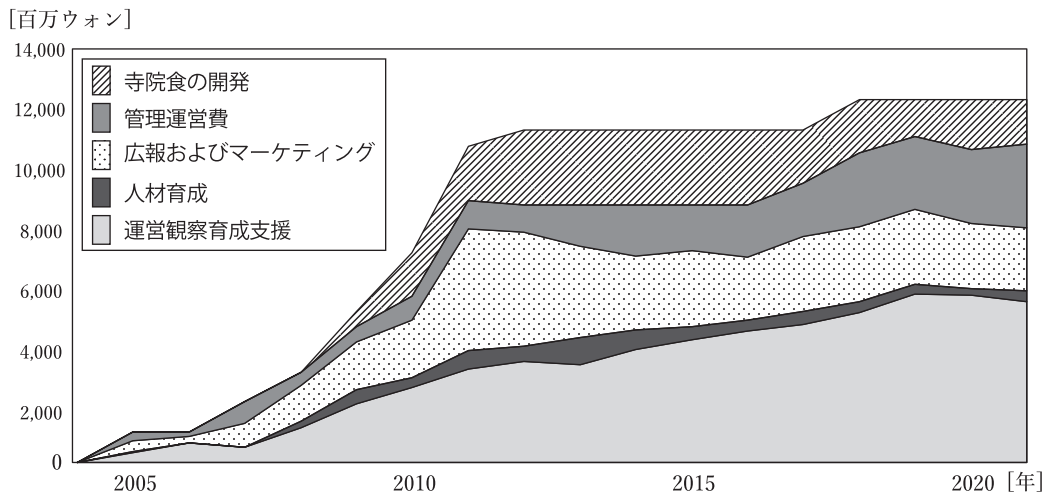


図2 韓国のテンプルステイに関する年度別経常費予算の推移（2004年～2021年）

（한국불교문화사업단（2022）より作成）

表2 韓国におけるテンプルステイ実施寺院の一覧（2024年）

実施寺院数	うちインバウンド 観光者 受入れ寺院数	実施プログラム数*			
		日帰り型	体験型	休息型	
ソウル特別市	17	7	17	20	7
釜山広域市	4	1	6	14	6
大邱広域市	2	1	1	5	2
仁川広域市	2	2	2	6	4
光州広域市	3	0	1	4	1
京畿道	23	1	19	60	22
江原特別自治道	15	2	5	34	15
忠清北道	7	2	12	23	8
忠清南道	12	1	5	27	21
全北特別自治道	8	3	3	16	11
全羅南道	24	3	13	41	28
慶尚北道	19	3	6	38	26
慶尚南道	15	1	9	31	24
世宗特別自治市	1	0	1	2	1
済州特別自治道	4	1	4	6	6
合計	156	28	104	327	182

\*公式HPで公開されているプログラムのみ表示（2024年12月現在）。

（テンプルステイ公式HPより作成）

ている。2009年には、経済協力開発機構（OECD）により、世界的に成功した5大観光商品のひとつとしてテンプルステイが選定された。2014年には世界観光機関（UNWTO）「観光と聖地巡礼」国際会議で、宗教ツーリズムの優秀事例として紹介されるなど、国際的にもテンプルステイの取り組みが評価されることとなった。

テンプルステイの観光資源化は、地方都市にも影響を与えている。表2は2024年12月時点における、韓国国内でテンプルステイを実施している寺院の一覧である。現在テンプルステイを実施する寺院は156か所あり、うち韓国最大の都市圏であるソウル大都市圏には42か所、それ以外の地域には114か所ある。テンプルステイは地方

に観光者を呼び込む新たな手段となっており、地方都市に所在する寺院がテンプルステイを行うことで、地方の地域経済や国際的な知名度の向上にも影響すると考えられている。

図3は、2002年から2021年までのテンプルステイ参加人数の推移を示している。テンプルステイ事業の開始から現在にかけて、事業を実施する寺院数は増加し続けており、より多くの観光者を受け入れる基盤が整備されてきた。また、コロナウイルス感染拡大の時期を除き参加者数も増加し続けてきた。コロナウイルスの感染拡大以前の2019年には、テンプルステイには29万4,796人が参加し、うちインバウンド観光者が4万7,058人であった



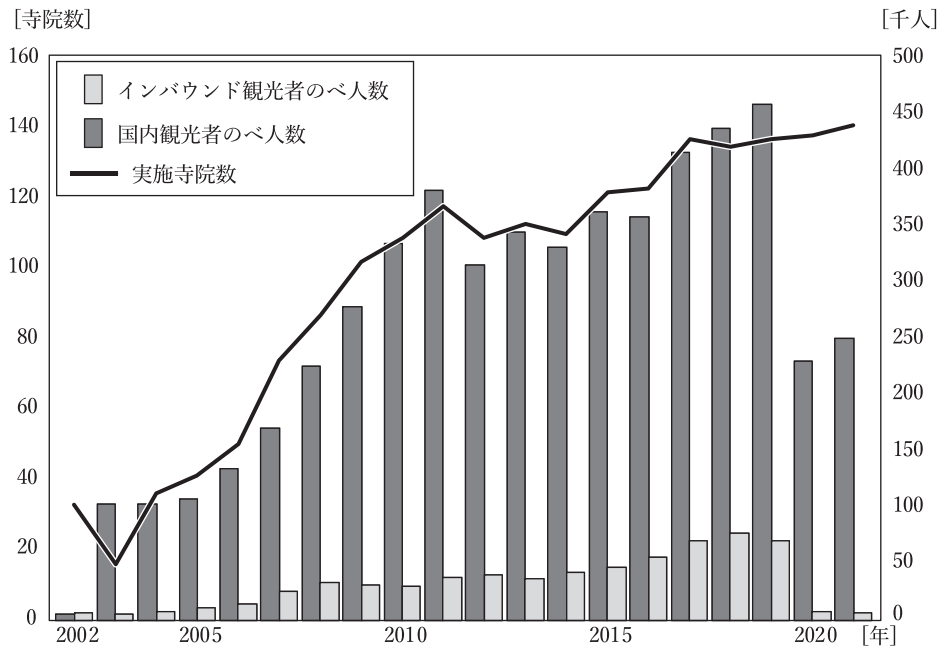


図3 韓国におけるテンプルステイ参加者数の推移（2002年～2021年）

（한국불교문화사업단（2022）より作成）

（Yoon et.al. 2021）。2022年時点で、韓国国内の142寺院がテンプルステイを実施した。2021年には、テンプルステイの参加者が累計600万人を超え、うちインバウンド観光者の参加はのべ65万人となった。

テンプルステイ事業の実施にあたって、専門人材・ボランティアの育成、欧米や日本などに向けた広報ネットワークの形成が進められるなど、当初からインバウンド観光者の需要が重視されてきた。なかでも、外国語に関する専門人材や資料の整備と、インバウンド観光者も利用可能な寺院内のアメニティの整備が重視された。テンプルステイ事業の開始以前から、仏教教団には「国際布教師」や「外国人寺社案内ボランティア連合組織」といった海外からの訪問者に向けた対応を行うスタッフが設置されていた。2002年以降のテンプルステイ事業の推進にあたって、新たに外国語対応に関するボランティアの募集が行われた。それに合わせて、英語や中国語、日本語、ドイツ語、フランス語、スペイン語などのインバウンド観光者向けの観光パンフレットやガイドブックなども作成された。また、韓国政府の文化観光部（現在の文化体育観光部）による支援を受け、宿泊者向けの洗面所やトイレなどの施設も整備された。以上の取り組みに加えて、韓国政府や国際交流団体、観光関連団体など国内での活動周知も並行して行われ、インバウンド観光者に向けテンプルステイが観光商品として周知されていくこととなった。

テンプルステイにおいては、従来の修養会のような仏



写真3 インバウンド観光者を対象としたテンプルステイの広告

（2024年2月筆者撮影）

教の教義に基づく儀式や、信仰の普及に重点を置くのではなく、リラックスした雰囲気の中で寺院の生活と僧侶の生活を理解することが重視される。インバウンド観光者は仏教を「韓国における伝統文化の一つ」として捉え、都市部から離れた豊かな自然の中で仏教に接するというテンプルステイの内容を評価しており、現在も多数のインバウンド観光者がテンプルステイに参加している（写真3）。

表3 韓国におけるテンプルステイに関わるスローガンの変化（2002年～2013年）

年	韓国語（日本語訳）	英語
2002	· 한국사찰로의 초대 / 산사의 초대 (韓国寺院への招待 / 山寺への招待)	· <i>An invitation to Korean temples</i>
2008	· 나를 찾아 떠나는 여행 (自分を探しに行く旅)	· <i>A journey in search of myself</i> · <i>Changing the way you see the world</i> · <i>You will travel to find real yourself</i>
2009	· 그곳에 가면 당신을 만날 수 있습니다 (そこに行けば、あなたに会えます)	· <i>Come and find yourself here</i>
2012	· 나를 위한 행복한 습관 (私のための幸せな習慣)	· <i>A joyful journey to find true happiness within myself</i>
2013	· 나를 위한 행복여행 (私のための幸せな旅)	· <i>A journey to find your true self</i> · <i>Finding your true-self</i>

(한국불교문화사업단 (2022) より作成)

#### IV まとめにかえて

本研究では、韓国におけるテンプルステイ事業を事例に、宗教文化としての仏教がどのような観光資源として位置づけられ、利用されてきたのかを検討した。

韓国国内には、地方都市を含めて多くの寺院が所在している。それらは文化財として評価される一方で、信者が日常的に仏教寺院に訪問する機会は少なく、信者数や参拝者数の減少のなかで布教や教化の機会も限られている。このような状況の中で、メガイベントの開催に伴う宿泊施設の不足に伴い寺院を観光者に開放するテンプルステイ事業が構想され、ローカルな宗教文化や宗教施設を観光資源として利用・転用する動きがみられた。仏教は韓国における「伝統的な精神文化」として位置づけられ、寺院で行われる宗教活動は観光資源に転用された。これらの一連のプロセスは、単なる観光振興としてのみでなく、仏教教団側では「仏教文化を世界に知らせる」事業として捉えられ、積極的な「読みかえ」が進められた。これらは、布教活動の一環として、観光資源が有力な「源泉」(卯田 2021)として用いられてきたといえる。また、韓国政府(文化体育観光部)をはじめとした行政もこれらの「読みかえ」を支持し、補助金等の支援を通じて宗教文化の観光資源化の取り組みに積極的に関与してきた。

また、テンプルステイは当初から仏教という宗教文化を活用しつつも、現在では、「心身の安らぎ・癒し」や「日常生活からの逃避」といった要素を重視している。宗教学者バックフォードは、宗教文化の組織的・教義的文脈からの分離を「浮動化 (Free floating)」として捉えた (Beckford 2001)。この浮動化の過程においては、思想や実践、シンボルの脱文脈化や断片化、そして別領域への再文脈化が生じるとされる (山中 2020)。テンプルステイに関するスローガンの変化 (表3) をみると、2008

年の「自分を探しに行く旅」といった表現をはじめとして、2010年代以降、自己啓発や自己探求といった自己論的欲求が強調されるようになった点が読み取れる。本研究で対象としたテンプルステイの事例は、信仰を前提としない浮動化した宗教文化が人々のスピリチュアルな関心と接続され、より広範かつさまざまな欲求をもつ観光者を惹きつける観光資源ともなりうる点を示している。

また、現代のテンプルステイを特徴づける「日常生活からの逃避」という側面においては、日常生活空間からの移動そのものが重視される。その際に、「地方に所在する宗教空間」という、これまで顧みられなかった要素が新しい意味を持ちうる。以上の点については、韓国における都市システムや地方都市の都市構造、観光政策といった主題を踏まえた議論が求められていくといえるだろう。

#### 謝辞

資料収集にあたって、テンプルステイ統合情報センターのスタッフの方々には便宜を図っていただきました。末筆ながら御礼申し上げます。本稿は、科学研究費補助金基盤研究B(一般)「地方活性化に向けた韓国地方都市の時空間ダイナミズムに関する研究」(課題番号: 23K22033, 研究代表者: 兼子 純)および同「ライフスタイル型移住者の居住地選好からみた地域社会の存立基盤」(課題番号: 23K28330, 研究代表者: 松井圭介)の成果の一部である。

#### 注釈

1) 「城・社寺を見る文化財から「使う文化財」へ! ~城泊・寺泊を核とした地域の歴史的資源を保全・活用する補助金~」([https://www.mlit.go.jp/kankochonews05\\_000308.html](https://www.mlit.go.jp/kankochonews05_000308.html))より。



- 2) 「2023종교인식조사」종교인구현황과종교활동」(<https://hrcopinon.co.kr/ja/archives/28464>) より。また、全人口のうち「無宗教」が51%、「その他の宗教」の信者が2%となっている。これらの傾向は2018年以降の推移と大きな変化はない点も指摘されている。
- 3) UNESCOは、2018年の第42回世界遺産委員会で「山寺, 韓国の山地僧院 (산사, 한국의 산지승원)」の世界文化遺産登録を決定した。

## 文献

- 岩鼻通明 (1999) : 観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌 (第3報). 季刊地理学, 51, 19-27.
- 卯田卓矢 (2015) : 比叡山における鉄道敷設と延暦寺. 歴史地理学, 57(3), 20-35.
- 卯田卓矢 (2018) : 世界遺産齋場御嶽における来訪者の特性とスピリチュアリティ—日本人・外国人来訪者の行動比較を通して—. 地理空間, 11, 21-46.
- 卯田卓矢 (2020) : ツーリズムによる聖地運営システムの構築—比叡山延暦寺を事例として—. 山中 弘編: 『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂, 149-168.
- 卯田卓矢 (2021) : 戦後の比叡山における自動車道建設と「比叡山総合施設計画」. 交通史研究, 98, 32-53.
- 卯田卓矢・松井圭介 (2016) : 大洗磯前神社における信仰と観光. 人文地理学研究, 36, 77-101.
- 大橋昭一 (2020) : ツーリズムの定義・概念・理論類型: ツーリズム理論研究の出発点の諸問題. 観光学, 23, 31-37.
- 門田岳久 (2010) : 「宗教」の資源化・商品化・再日常化—巡礼ツーリズム, 及びその地域的展開からみた「生活」論としての宗教研究試論. 国立歴史民俗博物館研究報告, 156, 201-243.
- 川添 航・劉 逸飛・坂本優紀・鈴木修斗・薄井 晴・中山玲・付 凱林・王 倚竹・綾田泰之・杉谷大樹・松井圭介 (2023) : 小豆島における宗教ツーリズムの変容と巡礼者の経験の特徴. 人文地理学研究, 41, 39-54.
- 許 油 (2004) : 朝鮮仏教と平和思想. アジア・キリスト教・多元性, 2, 51-66.
- 金 龍泰 (2017) : 『韓国仏教史』春秋社.
- 佐藤 厚 (2019) : 『はじめての韓国仏教: 歴史と現在』佼成出版社.
- 深見 聡 (2017) : 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」とダークツーリズム—ゲストとホストの邂逅の視点から—. 観光学評論, 5, 185-196.
- 松井圭介 (2017) : 『観光戦略としての宗教—長崎の教会群と場所の商品化—』筑波大学出版会.
- 山中 弘 (2020) : 序論: 現代宗教とスピリチュアル・マーケット. 山中 弘編: 『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂, 1-23.
- 李 賢京 (2008) : 日本における韓国プロテスタント教会の展開—「純福音教会」を中心として—. 現代社会学研究, 21, 59-77.
- Beckford, J.A. (2001) : Social Movements as Free-floating Religious Phenomena. Fenn, R.K. ed. The Blackwell Companion to Sociology of Religion. Blackwell Publishing, Oxford, 229-248.
- Kaplan, U. (2010) : Images of Monasticism: The Temple Stay Program and the Re-branding of Korean Buddhist Temples. Korean Studies, 34, 127-146.
- Moon, H. and Somers, B.D. (2023) : The Current Status and Challenges of Templestay Programs in Korean Buddhism. Religions, 14. doi.org/10.3390/rel14030409.
- Ross, S., Hur, J.Y.C. and Hoffman, J. (2021) : Temple stay-cation Opportunities during and beyond Pandemic condition. Journal of Tourism & Sports Management, 3, 390-397.
- Scriven, R. (2014) : Geographies of Pilgrimage: Meaningful Movements and Embodied Mobilities. Geography Compass, 8, 249-261.
- Yoon, H., Min, K. and Kim, C. (2021) : Harmony of Sustainability and Productivity: Korean Templestay as Sustainable Tourism. Sustainability, 14. doi.org/10.3390/su14010044.
- Wang, W. (2011) : Explore the Phenomenon of Buddhist Temple Stay in South Korea for Tourists. Master's thesis of University of Nevada, Las Vegas.
- 한국불교문화사업단 (2022) : 『템플스테이 20년사』 한국불교문화사업단, 서울.
- 한국불교문화사업단 (2018) : A Journey to Find True Self Templestay. 한국불교문화사업단, 서울.

## The Development and Regional Significance of “Temple Stay” in Korea

KAWAZOE Wataru\*

\* Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University

### Abstract :

Since the 2000s, the trends in religious tourism in the Republic of Korea have highlighted the “Temple Stay” program, which began in 2002. This article analyzes how the significance of local religious culture and facilities has evolved in developing tourism resources. The implementation of the Temple Stay program has transformed religious spaces and practices into tourism products for the dissemination of a wide range of Korean culture. Buddhist organizations have also viewed this positively as an opportunity to disseminate Buddhist culture in Korea. Recently, the Temple Stay program has emphasized elements such as “peace and healing of mind and body” and “escape from everyday life.” The contents of the experience program align with people’s spiritual interests and serve as a tourist resource that attracts individuals with diverse desires.

**Key words** : Religious culture, Spirituality, Tourism resource, Temple stay, The republic of Korea